報告タイトル (* 日本語と英語両方ご記入ください)

柯文哲・台湾民衆党と台湾の政党政治

“Ko Wen-je/Taiwan People’s Party and Party Politics in Taiwan”

氏名(所属)

松本 充豊(京都女子大学)

MATSUMOTO Mitsutoyo (Kyoto Women’s University)

要旨(800字程度)

台湾の2024年総統・立法委員選挙では、前者で台湾民衆党(民衆党)の柯文哲が三つ巴の争いに敗れたものの、既成政党に属さない候補としては同時選挙で過去最高となる得票率(25.46%)を記録した。後者では民衆党が既成政党と無縁な新興政党として初めて議席を伸ばし、柯文哲は医師出身で、政治経験も既成政党とのつながりもないアウトサイダーだった。2014年台北市長選挙に出馬、既成政党が支配する政治構造の打破を訴えて当選した。台北市長を2期8年務め、2019年に民衆党を結成して次の総統選挙を目指した。本報告では、2024年選挙での柯文哲と民衆党の善戦ぶりを「成功」と捉え、アウトサイダーの出現を促す制度的要因と既成政党の政治支配の打破を目指す「チャレンジャー政党」に関する議論を手掛かりに、その「成功」の理由を考察する。

民衆党が2020年立法委員選挙で議席を得たため、2024年総統選挙では柯文哲にとって出馬のハードルが下がり、選挙戦も現職不在で不利ではなかった。立法委員選挙との同時選挙では、組織力のある既成政党が有利になりがちだが、柯文哲と民衆党はSNSなどを駆使した選挙運動で不利な立場の克服を図った。チャレンジャー政党に見られるのが、反エスタブリッシュメントのレトリックで既成政党の統治能力への信頼を失墜させ、これまでの政治で支配的な対立軸と結びつかない争点を持ち込む戦略上のイノベーションである。既成政党への有権者の忠誠や愛着が失われるにつれ、それが選挙で成功する可能性は高まるとされる。柯文哲は2024年総統選挙で、戦略上のイノベーションにより当選した2014年台北市長選挙での成功モデルの再現を図った。既成政党の統治能力を批判し、中国との距離感が焦点となる中で後景に押しやられてきた、若者に切実な雇用・低賃金・住宅問題を争点化した。それが可能になったのは、中国の脅威に対する危機感が薄れ、対中関係での「現状維持」の見通しが強まり、有権者の「現状への不満」が浮上する余地が生じたことによる。ただし、選挙運動の限界と既成政党の支配力の強さから、当選には至らず善戦という「成功」とどまったといえる。